

## 冬季競技の競技力向上に向けた意見

冬季競技の競技力向上について、冬季オリンピック・パラリンピック競技団体連絡会議やアスリート部会などの会議及び個別ヒアリングなどにおける意見（計 15 団体 47 名）を取りまとめている。

### <主な会議>

- ・ 冬季オリンピック・パラリンピック競技団体連絡会議  
（第 1 回：平成 28 年 6 月 8 日）
- ・ 冬季オリンピック・パラリンピック競技団体連絡会議アスリート部会  
（第 1 回：平成 28 年 8 月 22 日、第 2 回：平成 28 年 12 月 13 日）
- ・ 冬季オリンピック・パラリンピック開催概要計画検討委員会  
（第 1 回：平成 27 年 8 月 6 日～第 4 回：平成 28 年 5 月 31 日）
- ・ 冬季五輪招致・スポーツ振興調査特別委員会  
（平成 28 年 6 月 20 日、8 月 1 日）

### <個別ヒアリング>

- ・ 主な実施時期  
（平成 27 年 5 月～平成 28 年 12 月）

### <取りまとめ項目>

- ・ 現 状  
現在の競技レベル・成績はどのようなものか
- ・ 課 題  
「現状」における課題・問題点
- ・ 方向性  
「課題」解決のために考えられること
- ・ 必要な機能  
「方向性」に従って進む上で必要な機能やトレーニング施設等
- ・ 事 例  
参考となる国内、国外の事例

## ＜ 冬 季 競 技 全 般 ＞

現 状 及 び 課 題	「現状」における課題・問題点
	<p>2014 年ソチ大会 出場数：119、メダル獲得数：8（17 位）、入賞数：20</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 味の素 N T C や J I S S は夏季競技がメインであるため、利用しづらい。</li> <li>○ 各競技施設における利用時間が限られており、アスリートが自由にトレーニングできる環境ではない。</li> <li>○ 大人数での長期間の合宿に対応できる宿泊施設が不足している。</li> <li>○ 多くの施設が単独競技のみで形成されているため、競技を越えたコミュニケーションや連携等が困難である。</li> <li>○ 夏季もトレーニングできる環境が整備されていない。</li> <li>○ 科学的なトレーニングや研究などを行う施設がなく、J I S S は遠距離であるため、効率的に利用できない。</li> <li>○ 用具の開発やフォームの解析などの冬季競技専用の研究施設がない。</li> <li>○ トップ以外のアスリートやジュニアがトレーニングできる環境が整備されていない。</li> <li>○ ジュニアの育成環境が整備されていないため、高校卒業後の継続率が低く、競技人口は減少している。</li> <li>○ 一般の人が見学や体験を行える環境が整備されていない。</li> <li>○ 障がい者アスリートがトレーニングできる施設がなく、北海道で活動できない。</li> <li>○ 障がいのある人がスポーツを楽しめる環境が整備されていない。</li> </ul>
方 向 性	「課題」解決のために考えられること
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 国内や国外のアスリートが集まり、トレーニングや合宿、交流を行える施設</li> <li>○ 競技別強化拠点の指定の継続と連携</li> <li>○ 実践施設と近接した実験施設</li> <li>○ アスリートとしての生活環境を整える場</li> <li>○ 夏季競技アスリートがオフシーズンにトレーニングできる場</li> <li>○ 夏季もトレーニングできる環境</li> <li>○ 冬季競技専門の研究施設</li> <li>○ 北海道出身アスリートの活用（研究者との意見交換など）</li> <li>○ 一般の人の利用や見学が行える環境</li> <li>○ 地域の指導力向上によるジュニア育成</li> <li>○ 障がい者アスリートが利用できるトレーニング設備</li> <li>○ 障がいのある人や子どもがスポーツを楽しめる環境</li> </ul>
必 要 な 機 能	「方向性」に従って進む上で必要な機能やトレーニング施設等
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ スポーツ科学・医学・情報などの研究設備（医療、薬、ドーピング、食事など）</li> <li>○ 情報集約・分析設備（フォームチェック、カーリングストーンの動作解析など）</li> <li>○ 体力・形態測定設備（筋力測定、骨密度測定など）</li> <li>○ 用具の開発研究設備（スキーやスケートのエッジ、ソリ、障がい者スポーツ用具など）</li> <li>○ 1 年中競技の実践トレーニングができる環境</li> <li>○ 一般トレーニング設備（ウエイト、低酸素（高地）トレーニング設備など）</li> <li>○ ウインタースポーツの普及活動（見学や体験の場の提供など）</li> <li>○ アスリートやジュニア、指導者が競技を越えて頻繁に情報交換できる場</li> <li>○ アスリートのセカンドキャリアの活用（研究者との意見交換、助言など）</li> <li>○ 冬季版アカデミー事業の検討（選手強化、競技力向上、人材育成など）</li> <li>○ 競技場やトレーニング施設と近接した宿泊施設（大人数での合宿や研修、会議に対応）</li> <li>○ 障がい者スポーツの環境整備（障がい者アスリートのトレーニング設備、体験の場の提供）</li> </ul>

## ＜スキー・アルペン＞

現 状	現在の競技レベル・成績はどのようなものか
	<p>2014 年ソチ大会 出場数：2、メダル獲得数：0、入賞数：0</p> <p>※JOC では海外施設を利用すべきという考えであり、試合の映像などのデータを集約する施設は設置できるが、アルペン専用の施設は考えていない。</p>
課 題	「現状」における課題・問題点
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 高校生以上はトップアスリートしか継続しないため、競技人口が減少している。</li> <li>○ 国や都道府県が運営するスキー場がないため、国内において NTC 競技別強化拠点の指定を受けている施設がない。</li> <li>○ 一般客も利用する民間スキー場でトレーニングや大会を行っているため、水撒きやコブの作成など自由に利用できない。</li> <li>○ 斜度などの競技環境に合うスキー場も限られている。</li> </ul>
方 向 性	「課題」解決のために考えられること
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ トレーニングできる環境</li> <li>○ 必要とするトレーニング設備の検討</li> <li>○ 海外遠征の負担が減少するなどのサポート体制の検討</li> </ul>
必 要 な 機 能	「方向性」に従って進む上で必要な機能やトレーニング施設等
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ スラロームコース（可能であれば屋内施設）</li> <li>○ 用具の開発研究（スキーのエッジ）</li> </ul>
事 例	参考となる国内、国外の事例
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ オーストリア（ラムソー）にはスキー連盟が所有しているコースがあり、一般開放もしながら強化施設としている。</li> </ul>

## ＜スキー・クロスカントリー／ノルディック複合＞

現 状	現在の競技レベル・成績はどのようなものか
	2014 年ソチ大会 クロスカントリー…出場数：6、メダル獲得数：0、入賞数：0 ノルディック複合…出場数：9、メダル獲得数：1、入賞数：2
課 題	「現状」における課題・問題点
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 高校生以上はトップアスリートしか継続しないため、競技人口が減少している。</li> <li>○ 夏季は雪上でトレーニングを行えない。</li> <li>○ 夏季は1ヶ月ごとに JISS へ通い、情報収集や測定を行っているが、効率が悪い。</li> </ul>
方 向 性	「課題」解決のために考えられること
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 夏季も雪上でトレーニングできる環境</li> <li>○ 情報収集や測定を行える設備</li> <li>○ バイアスロンと兼用の施設の検討</li> <li>○ 一般市民が気軽に利用できるクロスカントリーコース</li> </ul>
必 要 な 機 能	「方向性」に従って進む上で必要な機能やトレーニング施設等
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 地下又はトンネルのクロスカントリーコース（人工雪、0.5～1.0km、アップダウンあり、バイアスロンと兼用）</li> <li>○ 屋外クロスカントリーコース（冬季）</li> <li>○ ローラースキー用コース（200m/周、ローラースケートと兼用）</li> <li>○ ローラースキー用トレッドミル（幅が広い）</li> <li>○ 情報集約・分析設備</li> <li>○ 体力・形態測定設備</li> <li>○ 低酸素（高地）トレーニング設備</li> </ul>
事 例	参考となる国内、国外の事例
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ スロベニア（プラニツァ）には地下又はトンネルクロスカントリーコースと風洞実験施設、ジャンプ台（十数台）を国が建設した施設がある。</li> <li>○ オーストリア（ラムソー）では、夏季でも毎週末に子ども達が練習している。</li> </ul>

## ＜スキー・ジャンプ／ノルディック複合＞

現 状	現在の競技レベル・成績はどのようなものか
	2014 年ソチ大会 ジャンプ…出場数：12、メダル獲得数：2、入賞数：3 ノルディック複合…出場数：9、メダル獲得数：1、入賞数：2
課 題	「現状」における課題・問題点
	○ 高校生以上はトップアスリートしか継続しないため、競技人口が減少している。 ○ 味の素 NTC の風洞実験施設を利用するが、すぐに実践トレーニングを行えない。
方 向 性	「課題」解決のために考えられること
	○ 風洞実験などの科学的なトレーニングと実践トレーニングを同時に行える環境
必 要 な 機 能	「方向性」に従って進む上で必要な機能やトレーニング施設等
	○ 風洞実験施設（ジャンプ競技場に近い場所が望ましい）
事 例	参考となる国内、国外の事例
	○ スロベニア（プラニツァ）には地下又はトンネルクロスカントリーコースと風洞実験施設、ジャンプ台（十数台）を国が建設した施設がある。 ○ フィンランドやドイツの風洞実験施設は 1 回で約 20 万円かかるが、ジャンプ 20 回分と同じ効果がある。

## ＜スキー・フリースタイル／スノーボード＞

現 状	現在の競技レベル・成績はどのようなものか
	2014 年ソチ大会 フリースタイル…出場数：10、メダル獲得数：1、入賞数：1 スノーボード…出場数：9、メダル獲得数：3、入賞数：2
課 題	「現状」における課題・問題点
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 高校生以上はトップアスリートしか継続しないため、競技人口が減少している。</li> <li>○ 競技を行える施設が限られている。</li> <li>○ 海外遠征などの負担が大きい。</li> <li>○ 競技の特徴・特性を備えている施設は民間経営しかないため、アスリートの年間金銭負担が大きくなる。</li> </ul>
方 向 性	「課題」解決のために考えられること
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ トップアスリート以外やジュニアが競技を行える環境</li> <li>○ ジュニアの発掘や育成への取り組み</li> <li>○ ウエイトトレーニング設備（アルペン、クロス系）</li> <li>○ 夏季も実践トレーニングができる環境（フリースタイル系）</li> <li>○ トランポリンなどを利用したトレーニング設備（フリースタイル系）</li> </ul>
必 要 な 機 能	「方向性」に従って進む上で必要な機能やトレーニング施設等
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ バグジャンプ（エアマット、着地練習が可能な施設）</li> <li>○ 映像解析・確認設備</li> <li>○ トレーニング設備（ウエイトトレーニング、トランポリン）</li> <li>○ 低酸素（高地）トレーニング設備</li> </ul>
事 例	参考となる国内、国外の事例
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ WOODWARD West, Tahoe（アメリカ）：バグジャンプ、スロープコース、映像確認設備</li> <li>○ 千葉 KINGS：バグジャンプ（エアマット、着地練習が可能な施設）</li> <li>○ カムイみさかスキー場（山梨県）：屋内ハーフパイプ、バグジャンプ（エアマット）</li> </ul>

## ＜スケート・スピードスケート／ショートトラック＞

現 状	現在の競技レベル・成績はどのようなものか
	<p>2014 年ソチ大会 出場数：25、メダル獲得数：0、入賞数：4</p> <p>○ 近年では中高生のメダル獲得選手のうち、道内出身者の割合が減少している。</p> <p>○ NTC 競技別強化拠点に指定されている明治北海道十勝オーバルでは、国が利用料を出して、アスリート専用の時間を設けている。</p>
課 題	「現状」における課題・問題点
	<p>○ 道内のジュニアは高校卒業後に大半が道外へ出て行ってしまう。</p> <p>○ 時間外使用などに対応した施設がなく、自由なトレーニング環境ではない。</p>
方 向 性	「課題」解決のために考えられること
	<p>○ ショートトラックのトレーニングが行える屋内リンク</p> <p>○ 映像確認と実践トレーニングを同時に行える環境</p> <p>○ 他の氷上競技と同時にトレーニングできる 2 階建ての屋内リンク</p>
必 要 な 機 能	「方向性」に従って進む上で必要な機能やトレーニング施設等
	<p>○ 屋内リンク（ショートトラック用）</p> <p>○ ローラースケート用コース（200m/周、ローラースキーと兼用）</p> <p>○ ローラースケート用トレッドミル</p> <p>○ 用具の開発研究（スケートエッジ）</p> <p>○ 風洞実験施設（ウェアの開発研究）</p> <p>○ 映像解析・確認設備</p>
事 例	参考となる国内、国外の事例
	<p>○ モスクワのオーバルは全面がリンクとなっており、どの競技でも対応可能である。</p> <p>○ カルガリーのオーバルは内側にショートトラックとアイスホッケーのリンクがあり、他競技の練習を見ることで勉強や参考となる。1 箇所にとめることで施設維持費が抑えられる。</p>

## ＜スケート・フィギュアスケート＞

現 状	現在の競技レベル・成績はどのようなものか
	<p>2014 年ソチ大会 出場数：9、メダル獲得数：1、入賞数：5</p> <p>○ 道外の大学へ進学するアスリートが多く、リンク環境の良い大学へ流出する傾向が多い。</p> <p>○ フィギュアスケートの競技別強化拠点は名古屋の1施設だけであり、強化指定選手以外は利用できない。</p>
課 題	「現状」における課題・問題点
	<p>○ 他競技と共用のリンクでは長時間の使用やジャンプ、音楽の禁止などの制限が多い。</p> <p>○ 通年利用できるリンクが少ない。</p> <p>○ 専用利用の時間がアイスホッケーやカーリングなどと調整しなければいけないため、時間が限られており、札幌市外のリンクで練習することが恒常化している。</p> <p>○ 近年は高い技術が要求されるため、怪我をする選手が多い。</p>
方 向 性	「課題」解決のために考えられること
	<p>○ フィギュアスケート専用のリンク</p> <p>○ 観客席のないリンクが望ましい。</p> <p>○ 怪我をしない体づくりができるトレーニング設備</p>
必 要 な 機 能	「方向性」に従って進む上で必要な機能やトレーニング施設等
	<p>○ 屋内リンク（フィギュアスケート専用、カメラ、モニター、音響設備）</p> <p>○ トレーニング設備（ウエイトトレーニング）</p> <p>○ ストレッチなどができるアップスペース</p> <p>○ 医療設備（トレーナーの常駐）</p> <p>○ 指導者の育成（優秀なプロ）</p>
事 例	参考となる国内、国外の事例
	<p>○ 韓国（泰陵）の NTC</p>



## ＜アイスホッケー＞

現 状	現在の競技レベル・成績はどのようなものか
	2014 年ソチ大会 女子のみ出場、8 位
課 題	「現状」における課題・問題点
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ジュニアが継続する環境が整備されていない。</li> <li>○ 防具が大きいため、送迎などの親への負担が大きい。</li> <li>○ 合宿施設が不足している。</li> </ul>
方 向 性	「課題」解決のために考えられること
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ジュニアが継続できる環境</li> <li>○ 30 人/チームが 2 チーム同時に利用できる合宿施設</li> <li>○ リンクとすぐに行き来ができる会議室、控え室</li> </ul>
必 要 な 機 能	「方向性」に従って進む上で必要な機能やトレーニング施設等
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 屋内リンク（アイスホッケー専用、カメラ・モニター設備）</li> <li>○ 防具を置ける部屋</li> <li>○ 宿泊施設（大人数での合宿に対応可能）</li> <li>○ 会議室、控え室（リンクと近接）</li> </ul>
事 例	参考となる国内、国外の事例
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ モスクワのオーバルは全面がリンクとなっており、どの競技でも対応可能である。</li> <li>○ カルガリーのオーバルは内側にショートトラックとアイスホッケーのリンクがあり、他競技の練習を見ることで勉強や参考となる。1 箇所にまとめることで施設維持費が抑えられる。</li> <li>○ 韓国は大学にリンクがあり、合宿も行うことができる。</li> </ul>

## ＜ボブスレー／スケルトン＞

現 状	現在の競技レベル・成績はどのようなものか
	2014 年ソチ大会 出場数：2、メダル獲得数：0、入賞数：0 ○ 選手は全国で約 150 人、トップアスリートは約 10 人である。
課 題	「現状」における課題・問題点
	○ 大学の部活も減少しており、競技人口が少ない。 ○ 競技やトレーニングを行える施設が不足している。
方 向 性	「課題」解決のために考えられること
	○ スタート練習できる施設 ○ スタート練習施設は競技場と隣接が望ましい。 ○ 体験会や見学によるソリ競技の普及 ○ 夏季のローラーボブスレーなどの検討
必 要 な 機 能	「方向性」に従って進む上で必要な機能やトレーニング施設等
	○ ソリ競技スタート練習施設（競技場と隣接が望ましい、体験可能なもの） ○ 風洞実験施設（ウェアや姿勢の開発研究） ○ 用具の開発研究（ソリ） ○ 体力・形態測定設備 ○ 合宿施設 ○ 会議室 ○ アカデミーの実施
事 例	参考となる国内、国外の事例
	○ ドイツではソリ競技を地元学校の体育授業に取り入れている。 ○ カルガリーのスタート練習施設はとても立派である。 ○ ドイツではアトラクション施設として 1 年中営業している。 ○ サンモリッツはソリ競技の聖地として人気である。 ○ ドイツやオーストリア、スイスでは中華鍋ボブスレー大会を開催している。

## ＜リ्यूージュ＞

現 状	現在の競技レベル・成績はどのようなものか
	2014 年ソチ大会 出場数：1、メダル獲得数：0、入賞数：0
課 題	「現状」における課題・問題点
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 育成や体験会などを行える施設がない。</li> <li>○ 藤野リ्यूージュ競技場は地元の子どものみしか利用していない。</li> <li>○ トレーニング環境が整っていない。</li> </ul>
方 向 性	「課題」解決のために考えられること
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ スタート練習ができる施設（夏季も氷上で練習可能なもの）</li> <li>○ スタート練習施設での体験会や見学によるソリ競技の普及</li> </ul>
必 要 な 機 能	「方向性」に従って進む上で必要な機能やトレーニング施設等
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ソリ競技スタート練習施設（50m 以上、体験可能なもの）</li> <li>○ 低酸素（高地）トレーニング設備</li> <li>○ 風洞実験施設（ウェアや姿勢の開発研究）</li> <li>○ 用具の研究開発（専用靴、ソリ、マウスピース、寝具）</li> <li>○ 映像解析・確認設備</li> <li>○ 体力・形態測定設備</li> <li>○ 情報集積・分析設備（JISS のスマートシステムと連携）</li> <li>○ 診察・ドーピング検査設備（優れたトレーナーの常駐）</li> <li>○ トレーニング設備（ウエイトトレーニング、トランポリン、スラックライン）</li> <li>○ 栄養管理・指導</li> </ul>
事 例	参考となる国内、国外の事例
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ドイツやカナダ、スイスのように競技のすそ野を広げたい。</li> <li>○ カルガリーの NTC はスタート後にカーブが 2 つあり、約 100m の長さである。体験が可能であり、多くの観光客が訪れている。</li> </ul>

## ＜カーリング＞

現 状	現在の競技レベル・成績はどのようなものか
	2014 年ソチ大会 女子のみ出場、5 位 ○ 選手登録数は年々増えている。 ○ 近年では、北海道以外のジュニアが活躍している。
課 題	「現状」における課題・問題点
	○ 一般や観光客による利用が多く、アスリートやジュニアのトレーニング環境が限られている。 ○ 利用率が高いため、氷の状態が悪く、トレーニング環境が良くない。 ○ 海外に比べてアイスメイクの技術が低い。
方 向 性	「課題」解決のために考えられること
	○ アスリートやジュニアのトレーニング環境 ○ 質の高い氷でトレーニングできる環境 ○ アイスメイクの技術向上
必 要 な 機 能	「方向性」に従って進む上で必要な機能やトレーニング施設等
	○ カーリングシート（4 シート以上、他リンクとは別の空調設備、カメラ・モニター・タイマー・照明等の通常の大会が行える設備、隣接したアップスペース） ○ 質の高い氷の維持（アイスメイカーの常駐） ○ 質の高いストーンなどの用具 ○ 映像解析・確認設備（ストーンの動作解析や秒数計測、フォームチェック） ○ 研究設備（アイスメイク、スィーピング） ○ トレーニング設備
事 例	参考となる国内、国外の事例
	○ デンマークの男子チームはカナダのアイスメイカーによる質の高いシートで練習したため、2016 年に世界 2 位となっている。 ○ スコットランドの NTC はデパート内にあり、常に見学できる。 ○ 軽井沢の競技別強化拠点はシートが 6 面あり、ストーンの速度測定やフォームチェックを行える。

## ＜バイアスロン＞

現 状	現在の競技レベル・成績はどのようなものか
	<p>2014 年ソチ大会 出場数：13、メダル獲得数：0、入賞数：0</p> <p>過去の入賞は 1998 年長野オリンピックにおける女子 15km インディビジュアル 6 位のみ</p>
課 題	「現状」における課題・問題点
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ シーズンを通してトレーニングできる環境がない。</li> <li>○ ユース・ジュニアから射撃ができない。</li> </ul>
方 向 性	「課題」解決のために考えられること
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ バイアスロン専用のトレーニング設備（特に射場）</li> <li>○ 夏季も雪上トレーニングできる環境</li> <li>○ クロスカントリーと兼用の設備の検討</li> <li>○ 海外のアスリートからも利用される設備</li> </ul>
必 要 な 機 能	「方向性」に従って進む上で必要な機能やトレーニング施設等
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 屋外又は屋内射撃場（奥行き 50m、幅 2.75m 以上、射座 4～5 つ以上、弾痕確認用のカメラ・モニター設備）</li> <li>○ 地下又はトンネルのクロスカントリーコース（人工雪）</li> <li>○ トレーニング設備</li> <li>○ 低酸素（高地）トレーニング設備</li> </ul>
事 例	参考となる国内、国外の事例
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ドイツやノルウェー、イタリア、フランス、ロシア、チェコ、アメリカ、カナダなどのバイアスロンが強い国には必ず NTC がある。</li> </ul>

## ＜障がい者スポーツ（パラリンピック）＞

現 状	現在の競技レベル・成績はどのようなものか
	2014 年ソチ大会 出場数：79、メダル獲得数：6、入賞数：21 ○ 競技人口が少なく、規模が小さい。
課 題	「現状」における課題・問題点
	○ パラリンピックのトレーニング施設は東京にしかない。 ○ 障がいのある子どもが体育の授業を受けることや公園で遊ぶことができない。 ○ 用具が高額であり、裾野が広がらない。 ○ 北海道に用具を開発する企業がない。 ○ パラリンピックの認知度は高いが、観戦したことがある人は少ない。
方 向 性	「課題」解決のために考えられること
	○ 障がい者も利用できるトレーニング設備 ○ 障がい者スポーツだけではなく他競技と連携した活動 ○ 障がいのある人や子どもがスポーツを楽しめる環境 ○ 用具の開発、レンタル ○ 障がいのない人も一緒に楽しむことができる環境（心のバリアフリー） ○ イベントや教室などの情報提供の充実 ○ パラリンピアンの活動拠点
必 要 な 機 能	「方向性」に従って進む上で必要な機能やトレーニング施設等
	○ 障がい者スポーツに対応した施設 ○ アクセシ性の高い施設 ○ 障がい者スポーツを体験できる施設（用具のレンタル、イベントなどの情報提供） ○ 用具の開発研究（シットスキーなど）
事 例	参考となる国内、国外の事例
	○ スイス（ノットウィル）のパラプレジックセンター ○ フィンランドのヴォカッティオリンピックトレーニングセンター